

四日市看護医療大学看護医療学部臨床検査学科

高 崎 昭 彦*

はじめに

本学の設置母体である暁学園は第二次世界大戦終結直後、宗村佐信初代理事長が当時の四日市市長らと計らい、昭和21(1946)年、財団法人暁学園として暁女子専門学校(後に暁学園短期大学へ改組、さらに四日市大学短期大学部へ校名変更)及び暁幼稚園を設立したことに始まる。昭和23(1948)年に暁小学校、暁中学校を、翌24(1949)年には暁高等学校を設立し、創設数年にして総合学園の基盤を確立した。さらに昭和63(1988)年には「この地に4年制大学を」との地域社会の強い要望の中、四日市市からの要請を受け、公私協力型大学の先駆け的存在として四日市大学を開学し、ここに幼稚園から大学までを擁する総合学園としての一貫教育体制を構築することになった。



四日市看護医療大学 全景

I. 本学の沿革と概要

平成19年(2007)年に高度な専門性と豊かで温かい人間性をもった保健師・助産師・看護師の育成を目指し、学校法人暁学園と四日市市、市立四日市病院との公私協力方式により本学が開学した。平成23(2011)年には同大学院も開設した。これまでに約1000名の卒業生・修了生を輩出し、地域保健医療の発展に貢献している。「四日市看護医療大学」の名の通り、看護分野のみでなく、広く「医療」の分野に関わる新学科設立構想があり、令和2(2020)年4月、中部地区初の文部科学省指定校として四日市看護医療大学看護医療学部臨床検査学科がスタートした。

II. 臨床検査学科の教育理念

本学園の建学の精神「人間たれ」。これは「人を愛し、学問を愛し、美を愛する人間を育てる」という理念が込められている。この建学の精神に基づき本学科は「確かな倫理観と幅広い教養、豊かな人間性を備え、医療現場で活躍しうる高度かつ実践的な専門知識と専門技術の習得により、科学的根拠に基づく臨床検査の知識・技術を通じてチーム医療・多職種連携を担い、医学・医療の進歩・発展に貢献するとともに、地域住民の医療と健康を支えることのできる臨床検査技師を養成すること」を目標に教育を行っている。特に「現場で即戦力となる臨床検査技師」養成に力を入れている。

* 四日市看護医療大学看護医療学部臨床検査学科 takasaki@y-nm.ac.jp

III. 臨床検査学科の特色

本学科は上記の学園の沿革・歴史、大学全体の教育理念、四日市市との公私協力方式に沿った学科教育を行い、現場経験豊富な若手教員を中心に「プラスαの知識・技術を兼ね備えた臨床検査技師」を育成していく。「指定校」でありながら選択科目も充実させ、「承認校」の要素も多く取り入れた特徴的なカリキュラムを組んでいる。以下に特色ある教育の一端を紹介する。

1. 看護学科との連携

臨床検査技師の業務拡大によって検体採取についての内容が拡大された。また病棟検査技師を配属する医療機関も増えており、患者様と接する場面も増加し、コミュニケーションスキルも重要となり、多職種連携が必須になってくると考えられる。多くの教育機関が「チーム医療」を科目に取り入れているが、それだけでなく、「基礎科目」において可能な限り、看護学科との合同開講を実施している。他職種を学ぶ学生同士の交流により、学生が得るチーム意識は大きい。またコミュニケーションのみならず、「看護学概論」「リハビリテーション論」「介護技術演習」なども受講し、在宅医療分野でも活躍できる臨床検査技師、介護・看護技術を併せ持つ臨床検査技師を養成する。

2. 幅広い知識と高度な専門技術の習得

プラスαの知識・技術を兼ね備えた臨床検査技師を育成するために、「薬理学」「栄養学」「食品

学」「音楽療法」「人間工学」など多彩な選択科目を用意している。履修の証ともなる民間資格の取得にも力を入れている。院内 NST、地域包括医療にも力を発揮してくれることを期待している。その他にも「先端医療」「遺伝子検査学」「細胞培養技術学」など次世代医療に関連する科目も取り入れたカリキュラムになっている。

3. コミュニケーション能力を高め、「現場に強い」臨床検査技師の育成

本学科では、IPE(多職種連携教育)にも力を入れ、臨床検査技師として現場をよく知る教員はもちろん、本学科指定医療機関の現場教員にも講義をお願いし、医療現場での最新知識、技術に触れることができる工夫もしている。本学科専任・兼任教員として、医師、看護師、薬剤師、臨床工学士、理学療法士として現場経験を持つ教員によるそれぞれの経験を生かした専門科目開講も特徴の1つになっている。今年度の実施は新型コロナウイルス感染拡大により見送られたが学生の課外活動として地域健康イベントの企画運営も計画している。県臨床検査技師会、各種学会のイベントにも積極的に参加させたいと考えている。このような活動により専門知識習得のみならず広くコミュニケーションスキルを身につけさせることを目的としている。

4. 質、量ともに充実した「臨床実習」

本学科は中部圏を中心とし、51の指定医療機関にご協力いただき臨床実習を行う。特色としては、病院だけでなく検査センター、健診センター、



臨床検査学科 B 館



臨床検査学科教員

介護施設(看護学生に同行)での実習も行い、病院は複数施設で実習が行えるようローテーションを組んで実施する。実習前には「OSCE」を取り入れた「臨床実習前教育」「臨床実習直前教育」を履修しより実践的な知識・技術を学び、臨床実習につなげる。また臨床実習後は「臨床実習後教育」として臨床実習で得た知識・技術を演習形式で総括する。「臨床実習」10単位、「臨床実習前教育」1単位、「臨床実習直前教育」1単位、「臨床実習後教育」1単位を行い、臨床実習関連単位として13単位を履修する。

5. 充実したキャリア支援

1年次前期には四日市市との公私協力方式により、市立四日市病院にご協力いただき、医療現場を見学させていただく機会がある。早い時期に職業観を芽生えさせ、今後の専門科目履修に良い影響を与えることが期待される。また模擬試験形式により国家試験にも早い時期に触れさせる工夫をしている。2年次の長期休暇を利用し病院見学実習も積極的に参加させ就職に関する意識も高める。「キャリア支援講座」も不定期に実施し、国家試験合格から就職まで教員による強力なサポート体制を考えている。

IV. 細胞検査士コース

本学科の特色として、中部地方の4年制大学で初めての文部科学省指定校として発足したことと合わせて中部地方で初めて学部教育において「臨

床検査技師」国家試験受験資格と「細胞検査士」認定試験受験資格を得られる、いわゆる“ダブルライセンス”が取得可能になる細胞検査士コースを併設している。現在細胞検査士の数は減少傾向にあり、中部圏での医療機関からは大きな期待が寄せられている。細胞検査士が扱う業務をより得意とするAI(人工知能)が医療現場に導入されているが、より高度で専門的な知識・技術をもってAIと共存していく分野でもある。本学科では2年前期より細胞検査士基礎科目を4単位、3年後期の「臨床細胞学演習」1単位を全員に履修させ、3年次終了時に選抜を行い、選抜された学生は4年次に945時間の「細胞検査士専門科目(講義・実習)」を行う。かなりタイトな履修になるが、常勤の細胞診専門医を中心とした専任教員、経験豊富な現場からの非常勤講師で対応していく。選抜制となるが、4年次開講科目以外の細胞診関連科目は全員履修するため、卒後、本学の卒業生は「高度な細胞検査の知識・技術を持つ臨床検査技師」として現場に出ることができると期待している。細胞検査士コースは、個人で使用できる細胞診専用の顕微鏡、ディスカッション顕微鏡、大学所有スライド標本も数多く揃えている。バーチャル顕微鏡(導入予定)なども使用し、より教育効果を高めることを考えている。

おわりに

本学は、私立大学ではあるが、四日市市との公



細胞検査士コース実習室

私協力型大学であるため、四日市をはじめ、三重県下の地域医療に貢献するという使命がある。学生教育においてもその使命を理解させる目的として2年後の看護学科新カリ、臨床検査学科新カリに「四日市学」が導入される。四日市市政はもちろん、四日市市を中心とした地域医療について学ぶことができる特徴的な科目になっている。臨床検査技師としても現状の医療現場だけでなく広く地域包括ケア医療にも参入すべきといわれている。「四日市学」をきっかけとして広い視野を持った医療人になってほしいと考えている。本学の特徴

は、看護学科と臨床検査学科の2学科ということもあり、協力体制を基に、看護学科でも臨床検査に関する科目を開講している。“検査値が読める看護師”、これも本学ならではの特色かもしれない。繰り返しになるが本学園の建学の精神「人間たれ」。これは「人を愛し、学問を愛し、美を愛する人間を育てる」という理念が込められている。大学をあげて地域医療はもちろん、日進月歩の先端医療にも貢献できる、そしてなによりも「温かい心をもった医療人」育成に努めていきたい。